

高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

Newsletter

No.026

2014.9

- ナンバリング101
- FD活動について
- スタッフから一言

信州大学 | 高等教育研究センター
SHINSHU UNIVERSITY



ナンバリング101

番号をつける(ナンバリング)とは？

「119」は消防と救急、「110」は警察、国内であれば、誰でも知っている電話番号とその接続先ですね。ただし、お隣の韓国では、「119」は同じですが、警察は「112」です。ヨーロッパでは近年、緊急通報先として、この「112」に統一しようという動きがあるようで、多くの国でこれまでの番号と「112」の両方につながるようになってきているそうです。その他にも、番号を聞いただけで、その意味が分かるものがあります。例えば「JAZZ1001」といえば、ジャズの唄本を表すことがありますが、実際に1001曲の譜面が入っているわけではありません。「1001」は、ジャズに限らず、多くの曲の譜面を集めて安価に販売する本の代名詞となっているのです。

大学の授業にもそのような番号があります。皆さん、よく目にするのではないかと思うのですが、Physics 101あるいはコード化してPHY-101などという科目表記があります。アメリカ合衆国(US)の大学でよく利用されるものですが、「101」は、基礎あるいは入門科目の番号になっています。先ほどの例ですと、「物理学入門」あるいは「初歩物理学」ということになります。また転じて、授業以外でも、「事始め」とか「入門者向け」であることを示すこともあります。例えば、マサチューセッツ工科大学では、Getting Around: MIT 101というWebページ1)が大学のページの中にあり、大学での日常生活に関する案内情報を提供しています。ただし、この「101」の用法はUS以外ではあまり一般的ではありません。

コース・ナンバリングの効用

前置きが長くなりましたが、授業について上のような番号をつけることを、コース・ナンバリングと呼び、学生に対しては、学習目標の達成に向けた履修計画を検討するために、大学にとっては、その目標に対して必要十分な授業科目を提供しているかどうかを確認する一つの手段として、有用と考えられています。それぞれの科目番号をつけることは、すでに本学でも実施していますが、学士課程だけでも、共通教育と専門科目で、専門科目でも学部によって、その付与の仕方が違っており、体系性のあるものになっていません。上記のような効用を考えると、学士課程において、4年あるいは6年の一貫した教育課程を見通せる科目番号をつけることが必要になります。

先の例の「101」という番号については、百の位の「1」は、入門的な科目を示しています。十の位、一の位については、それぞれ詳細な意味を付している大学もありますし、「01」「02」と段階を追って、順次履修するようなどころもあります。百の位が授業のレベルを表していることは、USでは基本的に共通しているようです。例えば、以下のようになっています。

- 000 番台：準備レベル、単位にはならないリメティアル教育など
- 100 番台：初級(基礎)レベル、特に前提とする基礎知識を必要としないもの
- 200 番台：初級レベル
- 300 番台：中級レベル
- 400 番台：上級レベル(大学院の単位にもなり得るもの)
- 500 番台：大学院(修士)レベル
- 600 番台：大学院(博士)レベル

この他、学年別になっている場合もありますが、本来の目的から考えると、学年別よりも内容・レベル別の方が望ましいといわれています。また大学によって、3桁が4桁になる場合や、000番台がない、700番台以上があるという若干の違いはあるものの、USでは、ほぼ同じような考え方で、番号が付与されています。基本的な科目番号の構造としては、科目の内容を表すコード(分野コード：アルファベットで、2~4文字程度)に、上記の3桁あるいは4桁の数字コードを付与している例が多いようです。最初の例であれば、「PHY-101」の「PHY」が物理学分野の授業であることを示し、「101」は初歩の(百の位の1)最初の授業(残り2桁の01)で、例えば「力学・熱学」の入門授業になっています。ちなみに、「PHY-102」は「PHY-101」の次の科目で、「電磁気学」の入門授業になっている例も多いようです。

ナンバリングの導入に向けて

大学のカリキュラム改善の一つの方策として、コース・ナンバリングの導入が求められています。授業内容やレベルなどに応じて、ナンバーを付し整理することは、系統的な管理の容易さととどまりません。前に述べたように、学生にとっては、教育課程の中で自らが身につけたい内容を、どの科目をどの順番でどのように学んでいけば良いかが分かりやすくなります。それぞれの学部・学科・専攻で

は、提供している教育内容が、自ら掲げる人材育成の目標に即して体系的で効率的なものになっているかを確認し、必要な改善を行うきっかけとすることができます。高等教育の性格上、この番号付けを一律の規格で行うことは難しいですが、前述したレベル分け程度であれば、USの方法を踏襲することで、留学生や国外のオンライン受講生には、科目選択の目安となるでしょう。

これまで述べたナンバリングの状況とその効果を念頭に、本学に導入するとすれば、どのようなことを検討しなければならぬでしょうか？

まず大事なことは、ナンバリングを導入する主たる目的は何かを明確にする必要があります。前述のように、いくつかの効用がありますが、その中でもどれが一番大切にするかが重要です。すでに導入している北海道大学では、「教育課程の編成者（学部等）が実施する点検活動（各学部で実施している教育課程の中で、教育分野の偏りが無いか、学生にとって体系的な学修を実現できるようなカリキュラムになっているか等）の効率的な実施と、学生が容易に順次性・体系性を確認できるようにすることに重点を置いて構築」²⁾としており、「学生の検索容易性を高めることに主眼を置いたナンバリング制度とは異なる」²⁾と特徴を示しています。いずれも重要な効果ですが、どれに一番気を使ってナンバリングを行うのか、議論しておくことは大切でしょう。

次に、国際的統一規格がないということ、大学の多様な教育課程に関するものであることから、本学の教育課程の特徴に沿った分野コード（最初のアルファベット2～4文字）の設定と、ナンバリングにどのような体系性を盛り込みカリキュラムの特徴を示すかを議論する必要があります。学部・学科・専攻で異なる人材育成の目標を踏まえ、大学として共通に考えるべきナンバリングの在り方と、教育課程ごとに異なる特徴にも対応できるナンバリングの方法を、検討する必要があります。全学的な統一性も重要ですし、各課程の特徴を示すことも重要です。このような議論をすることで、大学として統一感を持ちつつ多様な特徴を持つカリキュラムを、有効に機能させることが可能になるでしょう。

その他、番号の十の位、一の位にどのような意味づけをするか、さらに第4の位を利用するか、ナンバリングに国際通用性あるいは海外でも通じるメッセージをどれだけ取り入れるかなどを検討することも、本学の教育課程の本質を見つめる良い機会になるでしょう。大学によっては、番号の十の位と一の位を単なる順次性だけに用いず、分野コードをさらに細分化する中分類、小分類として区別しているものもあります。果たして「0」から「9」の10の中分類で済むのかなどの議論も必要でしょう。国際通用性については、最初に述べた電話番号と同じで、世界で一律の基準があるわけではありません。ただし、百の位の授業内容のレベルについては、USおよびそれに近い国では通用すると考えられます。これ以上の通用性は、USであっても単位互換を行っている州内のコンソーシアムで統一基準のナンバリングを行っているいくつかの例³⁾はあるものの、それ以上の期待はしないほうが良いでしょう。

このような学内での検討を通じ、カリキュラムを見詰め、学生への効果を吟味し、より体系的で効率的な学修の方法を示し、多くの学生が成功を収められるのであれば、ナンバリングの導入は意味のあるものになるはずです。

【参考文献】

http://web.mit.edu/staff/gettingaround/mit101.html (2014年7月19日閲覧)
 北海道大学教育改革室「順次性のある体系的な教育課程の構築に向けて～ナンバリング実施の手引き～」北海道大学(2013年6月)
 例えば、Texas Common Course Numbering System (http://www.tccns.org/)

(文責：矢部正之)



活動報告

2014年度信州大学FDカンファレンスを開催しました

「2014年度信州大学FDカンファレンス」が8月21日(木)・22日(金)の1泊2日の日程で、筑北村の冠着荘にて行われました。本カンファレンスはFD研修と新任教員FD研修を併せ、コースを自由に選択できる分科会形式で行われ、今年度は「授業をデザインする」というテーマで、学内10部局から、40名の参加がありました。

今年度は、講師として神戸大学から米谷淳先生をお迎えし、「アクティブ・ラーニングをファシリテートするための「わざ」と「ちから」を考える」をテーマに全員参加の講義をしていただきました。また、高等教育研究センターの教員が講師となり、「学習時間調査」、「AP/成績の透明度」、「ICTの活用について」、「ループリックをつくろう」、「アサーション」をテーマに、FDを行いました。

どの分科会もグループワーク中心に行われ活発な意見交換がされました。また、終了時のアンケートでは、「FDで学んだことを授業で実践したい」「講義について考える良い機会になった」という感想が寄せられ、有意義なFDとなりました。

講師の米谷先生→



↑グループワークの様子



耐震改修工事のため、半年間、5人でひとつの研究室をシェアすることになりました。書架を見せてもらったり、ちょっとした雑談を重ねることで、その先生の色々な顔を知ることができ、アイデアも得られて楽しいです。忙しさにかまけて個人研究室にこもりがちになっていましたが、豊かな人間関係こそがFDの根底にあるのだ、と再発見することができました。
 (准教授 加藤善子)



スタッフからひとこと